

Key person



日本の“今”を支える「Key Person」——。
本誌記者が特別に選んだ経営者の方々の、
その言葉の向こうにある思いに触れていただきたい。

トップフォーラム(経営者マガジン/全国経済誌)掲載記事を
ご紹介致します。 (2014年4月号より)





森
久
之



(株)おばまの森 代表取締役

「障害者の居場所。 そう在り続ける施設を 未来へとつなぎたい」

障害者の共同生活や自立を支援する「おばまの森」創設者である森社長の名に由来する同社の社名には、実はもう一つ込められた意味がある。

施設のスタッフや利用者一人ひとりを木に見立て、木が集まって森になるように、と願っているのだ。創業から3年という短い期間ながら

その願いは着実に現実のものとなっており、オープン当初より大幅に広がった施設内には利用者やスタッフたちの笑顔が溢れている。

「絶対にやり遂げる」という強い気持ちで

スタートダッシュを決めた社長は、

大きく豊かな森を育むため、未来を見据え続ける。

(対談記事は100〜101頁に掲載)

志

志
will

絆
bond

will

「今」を生きる人がいる。
荒波に揉まれながらも活路を見出して——。
その高き“志”を支える信念に迫る。

輪
circle

匠
creation

心
heart

道
way



社会とのかかわり方と自立の術を教え 障害者の人生を真に豊かなものにする



代表取締役 **森 久之**

【森社長の足跡】
長崎県は小浜町出身。高校卒業後は太鼓芸能集団「鼓童」に入り、世界各地で公演活動を行う。23歳で故郷に戻ってからは建設会社に就職し、結婚を経て3人の子どもに恵まれた。障害を持つ次男の将来を想い、2010年に「おばまの森」を設立する。

×



ゲスト **加納 竜**

(株)おばまの森
障害福祉サービス おばまの森
ケアホーム・グループホーム事業所
放課後等デイサービスそら事業所

長崎県雲仙市小浜町南本町 1215 番地
TEL 0957-75-0888
URL : <http://www.obamanomori.com/>



「お子さんのために、そして他の障害者のために未経験の業界に飛び込まれた森社長。その勇気に感服致します。ぜひこれからも既成概念に囚われず、様々な「あったらいいな」を現実のものにしてほしい。」 加納竜・談

山と海に囲まれたのどかな町に 建つ『おばまの森』。障害者の ための共同生活介護事業や共同 生活援助事業、放課後等デイ サービス事業を手掛ける同所を 立ち上げたのは、自身も障害者 の親である森社長だ。当事者の 視点から提供される質の高い サービス——「おばま式」を構 築する社長に、お話を伺った。

加納 早速ですが、森社長の歩みから。
森 ここ小浜で生まれ育った私は、ある時、世界で活躍する太鼓芸能集団『鼓童』の公演に感動し、高校卒業後に一人『鼓童』の本拠地である佐渡島に渡りました。以後、私は青春時代を『鼓童』の舞台人として過ごし、日本、そして世界で活動していたんですよ。

加納 私も『鼓童』は知っていますよ！
世界一の和太鼓チームですよ。

森 ええ。ですが、長男ということもあって両親には反対されていたんです。“4、5年は自由にして良い”との約束で家を出してもらったので、それ以降は地元に戻り、父がグループ会社の社長を務めていた建設会社で働き始めました。妻と結婚したのはちょうどそのころで、3人の子どもにも恵まれました。

加納 そうでしたか。では、福祉事業に着手されたきっかけは？

森 私の次男は知的障害を持っていますね。ずっと家族で訓練をしながら育ててきたのですが、長じるにつれ「この子は大人になった時、どうやって生きていけばいいのか」と考えるように。そこで、“だったら次男が自立できるようにするための施設を自分でつくろう”と思い立ち、共同生活介護事業や共同生活援助事

業、放課後等デイサービス事業を手掛ける『おばまの森』を立ち上げました。
加納 既存の施設を利用されようとは思わなかったのですか。

森 確かに同事業を手掛ける施設は全国各地にあります。けれど私は、自分自身が本当に利用したい、住みたいと思える施設をつくりたかった。当事者であるが故に、ことさら障害者本人やそのご家族の気持ちがかかりますからね。そのため事業を起こす際には、“あったらいいな”と思うものをどんどん実現していきました。まずは障害者が住める場所をつくり、次に子どものころから訓練ができるように学童対象の施設を建てました。今後は彼らが働ける場所と、成長に伴った自立訓練を積める施設を建設する予定です。ちなみに当社の施設は完全バリアフリー。私が建築の知識を生かして設計したものだんですよ。また、受け入れ対象とするのは、知的障害、精神障害、身体障害の3つ全てです。当初は「やり過ぎじゃないの？」と言われたこともありましたが、私たちからすれば「これくらいやって当たり前」なんです。

加納 言葉の説得力が違いますね。

森 ありがたいことに、今では皆さんから「ここに家族を住ませてもらいたい」と言ってもらえるようになりました。私は、サービスの“質”において、長崎県No.1の施設を作り上げたいと思っています。また、障害者が働ける仕組みをしっかりと構築していくつもりです。

加納 社長が考える“障害者が働ける仕組み”とは？

森 私はアートにかかわるような仕事で障害者が収入を得られればと考えています。絵や写真が好きで、素晴らしい作品を生み出す障害者の方は多いですからね。皆さんの作品を二次加工して、Tシャツなどのグッズ商品にしたら面白いと

思っているんです。それに販売する時は障害者としてではなく、アーティストの作品として訴求したい。私は『鼓童』と建設会社で営業の仕事もしていたので、販路を開拓する自信はあるんですよ。でも、それだけでやっていくのは難しいでしょうから、ランチ専門の食堂を開くなど、飲食業も始めたいと思っています。スタッフが障害者というだけで、一般の飲食店と何ら変わりません。味とサービスの質を落とさない限り、長く続けることのできる仕事だと考えています。現金商売だという点も魅力の一つですね。また私は、食堂ができれば在宅の障害者の方に働いてもらいたいと思っています。施設に住む障害者には他の事業所で働いてもらい、棲み分けをしていきたいです。
加納 障害を持つ全ての方々に心を配っておられると。

森 生活に不自由を感じながらも自宅で過ごされている障害者は多いので、2014年には家事などのサポートを行う在宅支援のヘルパー事業も立ち上げようと考えています。また、数多の島がある長崎では障害者も島々に散らばっており、中には十分な福祉サービスを受けられずに困っておられる方もいます。ですから今後は、それぞれの島に拠点をつくり、地域の人々に施設を運営してもらいたいとも考えているんですよ。

加納 素晴らしい展望です！

森 また私の一番の目標は、この施設を末永く継続させること。そのためにも、親族中心に運営している施設を、いずれは志あるスタッフたちに全て譲りたいと思っています。障害者の居場所であり続けられるよう、次世代のリーダーとなれるような人材を育て、『おばまの森』を、自分たちで「計画・実行・評価」できる集団にしていきたいですね。

(取材／2014年1月)

「深い親心を以て障害者たちの可能性を広げていく」

。障害者である我が子が、大人になっても充実した人生を歩んでいけるように。——そんな想いで施設を立ち上げた森社長は、「おばまの森」に集う全ての利用者に対し、色々なことを教えた、体験させてあげたいという親心を抱いている。60歳近い利用者の中には、施設を訪れるのも初めて、という障害者もあり、社長はそんな人たちの実情を知るに付け、もつと若い時から社会とかかわりを持つていけば、人生の広がりも違つただろうに、と悔しく思うそう。だからこそ社長は、「映画も観られるよ、買い物もデパートもできるよ」と障害者やその家族に訴え、自立への挑戦をサポートし続けている。普通の家庭での暮らし方や社会とかかわり方を学べば、障害者一人ひとりの可能性はどんどん広がっていく。そう信じているからこそできることだ。また、素人同然の形で福祉業界に飛び込みながら、わずか2年半で事業を成長路線に乗せられている事実は、障害者やその家族のニーズをしっかりと掴んでいる、という証明となるだろう。障害者への深い愛情を以て歩みを進める社長の活躍から、目が離せない。

一家団楽